

翻訳

A. A. ミルン「アルマゲドン」

Armageddon

著 A. A. ミルン
A. A. Milne

訳 吉村 圭
Translation Kei Yoshimura

鹿児島女子短期大学

Keywords : A. A. Milne, First World War, English Literature

キーワード : A. A. ミルン, 第一次世界大戦, 英文学

[訳者解題]

本稿では、イギリスの作家A. A. ミルンが1914年に執筆した小作品「アルマゲドン」(“Armageddon”)の日本語訳を行う。⁽¹⁾ ミルンは『クマのプーさん』(*Winnie-the-Pooh*)の原作を書いた作家であり、ディズニーのキャラクターとして有名な「プー」の生みの親といえる作家である。その軽妙な作風のためか、ミルン及び彼の作品はこれまでの文学研究上あまり重要視されてこなかったきらいがあるが、彼が生きた時代や彼の伝記的事実から考えると、ミルン自身と彼の作品の価値は今の時代にこそ十分に評価されるべきであるように思える。というのも、ミルンは20世紀を象徴する2つの大戦の時代を生きた作家であり、とりわけ第一次大戦では陸軍に志願し、通信兵として激戦地ソムを体験しているのである。『クマのプーさん』の牧歌的な作風からは意外に思われることであるが、ミルンは大戦を直に体験した作家なのであり、第一次大戦の開戦から100年が経過し、その再評価がさかんに行われている現在だからこそ、その価値は「大戦」という文脈で見直されるべきであるように思われる。

本稿で取り上げる作品「アルマゲドン」は、まさにミルンを「大戦」の観点から考察するにふさわしい作品であるといえる。この作品の初出は1914年8月5日で、当時ミルンが編集助手をしていた大衆雑誌『パンチ』に掲載された。発行の日付からも明らかのように、この作品はイギリスからドイツに宣戦布告が行われた同年8月4日の翌日に世に出されているのである。またその執筆期間について推測すれば、作品内でセルビアとオーストリア＝ハンガリーとの開戦を元にしたストーリーが描かれていることから、両国間の戦争が始まった1914年7月28日以降に執筆が開始され、掲載された『パンチ』が発行される直前の8月4日ごろ、すなわちちょうどイギリスが開戦を表明した日までには脱稿していたものと考えられる。このように、この作品はその出版された日付や執筆期間からも極めてモニュメンタルであるといえる。しかしそれだけではなく、作品に描かれるストーリーもまた深く第一次大戦と関係している。というのもこの作品は明らかに、執筆当時に実際にリアルタイムで進行していたであろう、ヨーロッパが大戦の大火に飲み込まれてゆくまでのできごとをベースに描かれているのである。他の場所で詳しく論じたためここでの詳細な議論は避けるが⁽²⁾、例えばトムスク大佐によるエッセンランド国旗の銃撃は、1914年6月28日に起きたオーストリア＝ハンガリーの皇太子夫妻銃殺事件(サラエボ事件)を連想させるものであり、その結果として生じるエッセンランドとルリタニアとの間の「最後通牒」をめぐる一連のできごとは、同年7月23日にオーストリア＝ハンガリーがセルビアへと突きつけた最後通牒、ならびに同年7月25日に発表されたセルビアによるその一部拒否、そして同年7月28日の開戦、という史実と完全に符合している。つまりこの作品は、ヨーロッパが第一次大戦に突入しようとするそのさなか、当時まさに進行していた歴史的な事件等をリアルタイムに映し出した作品なのである。

ミルンは1934年に執筆した平和論『名誉ある平和』(*Peace with Honour*)の中で、第一次大戦に関して「2人がサラエボで殺されたことについて、ヨーロッパができた最善の対応はさらにもう1100万人を殺すことだった」(two people were killed in Sarajevo, and that the best that Europe could do about it was to kill eleven million more)と述べ、さらに同じ

箇所、「我々は猿から退化したのだ」(we are descended from the apes)と述べている(*Peace with Honour* 193)。つまりミルンにとって大戦とは、わずか2名が銃殺されたことで引き起こされ、結果として1100万人もの死者を出すという、「猿以下」の人間が引き起こしたできごとだったのである。ミルンはさまざまな場所で平和主義者であることを表明し、自伝『今からでは遅すぎる』(*It's Too Late Now*)の中では「私は1914年より前も平和主義者だった」(I was pacifist before 1914)と述べているが(*It's Too Late Now* 211)、平和主義者ミルンの大戦に対する「猿から退化した」と同様のアイロニカルな視線は「アルマゲドン」の中にあふれている。それが最も象徴的に表れているのが、作品の随所で登場する「酔っ払いたち」の存在である。例えば、この物語で戦争が引き起こされるそもそもの発端であるポーキンスは、ゴルフクラブのラウンジで「ウィスキーのソーダ割り」(whisky and soda)を飲みながら戦争の必要性を論じている(“Armageddon” 87)。また、「サラエボ事件」を思わせる「エッセンランド国旗の銃撃事件」の犯人であるトムスク大佐は、「翌朝ひどい頭痛で目を覚まし」(woke next morning with a bad headache)ていることから(“Armageddon” 88)、戦争の引き金を引くこととなるこの事件の直前に二日酔いになるほどアルコールを飲んでいたことがわかる。さらに「ディデルドルフの愛国心」の論説委員は「もう一杯のビールをよこした後」(after sending out for another pot of beer)にエッセンランド国内での戦意高揚をあおる記事を書いている(“Armageddon” 88)。このように「アルマゲドン」に描かれる戦争は、幾人もの「酔っ払いたち」の手によって引き起こされる、極めて滑稽でくだらないものとして描かれているのである。「アルマゲドン」が明らかに当時実際に起きた事件等をモデルに描かれていることを思えば、執筆当時のミルンは、今まさに起ころうとしていた実際の戦争を、「酔っ払い」たちによって引き起こされたような馬鹿げたできごととして、皮肉を込めて描き出そうとしていたことがわかる。それはこの作品が掲載された『パンチ』誌が得意とした風刺漫画(カリカチュア)の手法とよく似ているといえる。

このように「アルマゲドン」は大戦が勃発する直前のミルンの戦争観をよく表した作品であるといえるわけであるが、しかしミルンが「平和主義者」を自認していたことを思えば、このような戦争に対するアイロニーは当然であり、それ自体はあまり重要であるとはいえない。むしろ筆者がこの作品を、ミルンを「大戦」の文脈で語る上で極めて重要だと考える理由は、彼が何気なく描いたその結末部分にある。というのもこの物語の結末では、作品内で勃発した戦争の1年後に「10万人の英国の母親たちは夜中まで起きて、その息子が銃弾に倒れたことを通知する手紙を読む」(the hundred-thousandth English mother woke up to read that her boy had been shot)んだと書かれているのである(“Armageddon” 90)。この作品が世に出されたのは1914年8月5日のことであり、当然のことながら執筆当時のミルンは、始まろうとしていた戦争が長期化し、ヨーロッパに未曾有の被害を及ぼすことは知りえなかったはずである。しかしミルンはここで、その戦争が少なくとも1年は続き、10万人の兵士が撃たれるものとして描いている。この結末こそ、この作品の極めて重要な点なのである。

一般に開戦当初の大衆は、第一次大戦は短期決戦で終わるものと信じ、楽観的にその勃発を歓迎したと考えられている。その楽観的のムードはもっとも有名な「クリスマスまでには終戦」(It will all be over by Christmas)というフレーズに集約されており、近年の研究に限定しても例えば小関隆の『徴兵制と良心的兵役拒否』(小関 12)やNeil Championの*Poets of the First World War* (Champion 7)などでも、開戦当初の大衆の楽観的ムードを伝えるものとしてこの言葉が引用されている。さらに実際にイギリスがドイツに宣戦布告した翌日の『タイムズ』では、ドイツとの開戦を受けトラファルガー広場や国会議事堂前など、ロンドン中のいたるところが「ぎゅうぎゅうに押し寄せた人々で溢れ」(filled with a solid mass of people)、皆が「感情と静粛さをこめて」(with an emotion and solemnity)国家を歌い、バッキンガム宮殿では大衆の熱狂に答えるために国王が三度バルコニーに姿を見せたことが報じられている(*Times* 9)。荒木映子は『第一次大戦とモダニズム』の中で、開戦まもなく集まった大勢の志願兵の様子について「ちょっと大がかりなフットボールの試合、あるいはフランスへの小旅行」(荒木 9)とたとえているが、第一次大戦勃発当初のムードに対する一般的な解釈はおおよそそのような言葉に集約されるといっていいだろう。以上のように、開戦当初の大衆の熱狂は、当時流行した「クリスマスには終戦」という短期決戦を示唆する言説や、あるいは当時の新聞記事によって今にありありと伝えられているわけである。しかしながらこのことによって、現在の我々には、大戦が長期化、泥沼化した原因がさも当時の人々の「無知」にあったように思い込んでしまう危険があるといえる。つまり、第一次大戦があればほどまでに凄惨なものとなったのは、当時の人々がその規模を一切予測できず手放しにその開戦を歓迎したことに原因があり、その結末を知る我々には二度とそのような誤算を招く恐れはない、と思いを違える危険である。しかしミルンが「アルマゲドン」の中で描いた結末、すなわちその戦争が少なくとも1年は続き、10万人の兵士が戦死するという結末は、その膨大な被害が当時であつてもある程度予測できたことを明らかにしている。すなわち、確かに多くの人々が始まったばかりの大戦を楽観視し、その勃発

を歓迎した事実はあるようだが、一方でミルンのように戦争に冷静なまなざしを向けた人々にはその凄惨な結末は十分予見できたということをこの作品の結末は示しているのである。

「アルマゲドン」は大衆誌『パンチ』のわずか1ページに収められた小さな作品ではある。しかしその物語は明らかにヨーロッパを大戦へと導いた事件やできごとを土台とした、そのパロディともいべき形で書かれており、特にその結末部分に描かれた予見的な戦争の「未来」は、当時の人々の精神を映す1つの証拠となるものであるといえる。それはいわば、ミルンが現在の我々へ向けて鳴らした警鐘なのであり、その意味でこの作品は極めて重要なのである。以上から、大戦から100年が経ち、国際情勢が不安定なこの時代だからこそ、この作品は広く読まれる価値があるものであると考えられる。そのため、ここに「アルマゲドン」の日本語訳を掲載することで、その一助となればと考えている次第である。

【解題注記】

- (1) 「アルマゲドン」の初出は1914年8月5日発行の『パンチ』であるが、誌面では作品全体が1ページに収まる形で掲載されている。そのため本稿では引用箇所をより明確にするために、引用および翻訳はすべて『サニー・サイド』(*The Sunny Side*)より行う。
- (2) 拙著「第一次大戦のカリカチュアとしての『アルマゲドン』」参照。

アルマゲドン

ゴルフクラブの喫煙室ではよくあるように、会話は祖国イングランドの嘆くべき現状に関するものへと転じ、ポーキンスは話を次のように要約した。その日の朝、彼は傘と武器をかついだ子どもを引き連れて97番通りを行進しており、⁽¹⁾ その際、自分がたいそう調子が良いと感じたのだという。

「イングランドに足りないのはなあ」彼は背にもたれかかり、タバコをふかしながら言った。「イングランドに足りないのは戦争だ。(おいウェイター、ウイスキーのソーダ割りをもういっぴいたのむ)。俺たちは無気力になっちまってるよ。この甘ったれた状態が国をめっちゃくちゃにしちまってるのさ。他国とちょっとしたいさかいが起きることが、全くもって俺たちにとってはいいことなんだよ。」彼はウイスキーを一息に空けてしまった。「俺たちは無気力だ」彼は繰り返した。「下層階級の連中は近ごろではしつけがまったくなくなっちゃいな。俺たちが活気付くために必要なのは、戦争なのさ。」⁽²⁾

オリンパスの神々の間で、ポーキンスを落胆させてはならないことはよく理解されていた。来世で彼に何が起きようが私の知ったことではない。もっともそれは何かとてつもなく面白おかしいものになることだろう。しかし、この現世においては、彼が望んだことの全てがかなえられることになっている。したがって、神々はさっそく仕事に取り掛かることにした。⁽³⁾

ルリタニアの南端にある小さな村オスポヴァットには MARIA・シュトラルツという名の乙女が暮らしていた。彼女はトムスク大佐と婚約していた。

「ちょっと思うんだけど」と神の1人が言った。「MARIAが大佐を捨てるっていうのはどうかな。ポーキンスを喜ばせてやるためのアイデアがあるんだけど」

「MARIAがいったいこの件と何の」と別の若い神が言おうとしたが、直ちに制されてしまった。

「実際のところ」と先ほどの神が続けた。「これで充分伝わったんだがな。あの人間って生き物がどういうものかお前も知っているはずだ」

「じゃあみんな彼に同意するというということですか？」

みな同意した。

そのため MARIA・シュトラルツは大佐を捨てた。

そしてご想像の通り、このことは大佐を悩ませた。彼はルリタニアとエッセンランドの国境にある駐屯地を指揮する人物だった。彼は退屈な日々をしのぐために、川の反対側の駐屯地を指揮するエッセンランドの大佐といつもカードゲームに興じていた。トムスクは MARIA から別れの手紙を受け取ったとき、唯一できることは溺れ死ぬことであると考えた。しかしすぐに、自分よりも先に悲しみを川に沈めることに決めた。そして彼はその作業をあまりにもうまくやり遂げたため、

その日の夜には、マリアが自分を捨てたのではなく、エッセンランドの大佐がマリアを捨てたのだと信じ込むことに成功した。そこで彼はボートを漕いで対岸へと向かい、駐屯地の上ではためくエッセンランドの国旗へと向けて銃弾を浴びせた。^(iv) このようにしてマリアの敵討ちは果たされたのだ。そしてそのまま彼はベッドへと向かい、翌朝ひどい頭痛で目を覚ましたのだった。

(「さあ、始まったぞ」とオリンパスの神々は言った)

エッセンランドの首都ディデルドルフでは、論説委員たちがコートを脱いでいるところだった。

「ディデルドルフの愛国心」誌の論説委員は出前でもう一杯のビールをよこした後、このように書いた。「我が愛する祖国の国旗に浴びせられたこの新たな辱めについて知れば、真にエッセンランド人であるすべての者の血は沸き立つに違いない、この辱めは血によってのみ拭い去ることができるものである。」それから1つの文の中に2つ「血」という語があることに気づき、2つ目の「血」を消して、代わりに「剣」と書いた。それからタバコに火をつけた。「長年、エッセンランドはルリタニアの挑発に苦しめられてきたが、我々は威厳ある沈黙を貫いてきた。しかし先の辱めには、もはや我々の血と肉は耐えることができない。」と、ここでまたしても「血」が出てきたが、今回は文が改まっていたため、この「血」は消さずに残すことにした。「我々はこのように言っても咎められることはないだろう。もし我が国がこの辱めをそのまま許してしまったら、ヨーロッパ諸国の眼前でエッセンランドの威信が失われる、それも完全に失われてしまうだろう、と。^(v) そのようなことになれば、我が国は一流国家から五流国家に転落することになるだろう。」しかし彼はその手段については何も言わなかった。

エッセンランドの大臣は議事堂の両脇から厳かな拍手を受けながら、これまで辿った手順について次のように報告をした。彼はルリタニアに最後通牒を送り、その中で謝罪と10万マルクの賠償金、そしてトムスク大佐を公の場で降格することを要求した。その中でもトムスクの降格については、エッセンランド陸軍総司令官の手によって、大勢の撮影隊の前で肩章を剥ぎ取る儀式を行わなければならない、というものだった。そしてその点で交渉は決裂し、開戦が宣言されたのだ、ということだった。

ルリタニアは謝罪と賠償金、そしてトムスク大佐を降格することについて最後通牒の通りに応じていた。しかしトムスクを降格する際の儀式については、ルリタニア陸軍総司令官の方がより上手く執り行うことができるものと主張した。そしてそうでなければ、ルリタニアは統治者であることを辞めたほうがまだ、というのもそんなことになればルリタニアはヨーロッパ諸国の眼前で威信を失い、五流国家に転落することになるためだ、と主張した。^(vi)

この主張に対してありえる返答は1つしかなかった。そしてエッセンランドはただそれを実行しただけだった。すなわち、ルリタニアを侵略したのだ。

(「すごいじゃないか」オリンパスの神々は互いに言い合った。

「だけど何か間違っていないですかね」若い神が尋ねた。「ポーキンスはエッセンランドではなく、イングランドに住んでるんですよ。」

「まあ待て」他の神々がそれを制した。)

ボロヴィアの首都では「ボロヴィアの愛国心」誌の論説委員が仕事に取り掛かった。「ボロヴィアはいかにして耐えればいいのかだろうか？」彼は問うた。「もしエッセンランドがルリタニアを占拠したとしたら、ボロヴィアに暮らす思考能力のある者たちは、その門まで敵が迫ってもなお、これまで通り安全だと感じるだろうか？」(週給5マルクの労働者たちはこれまでとなんら変わらないと主張するかもしれないが、その場合彼らは「思考能力のある者」とは呼べまい)「ルリタニアの高潔が守られることこそ、ボロヴィアの威信にとって不可欠なものである。さもなければ、我々は直ちにヨーロッパ諸国の眼前で五流国家に成り下がるのを甘受することになるだろう。」全政党から厳かな拍手を受けながら、ボロヴィアの大臣はスピーチの中でそれと同じことを言った。そしてこのようにして帝国陸軍は動員され、見送りの人々によって熱狂的な愛国心がすばらしく上手に表現されたさなかを抜け^(vii)、ボロヴィア軍部隊は前線へと向かったのだった…。

(「さあ、ここまで来たぞ」とオリンパスの神々は言った。

「だけどまだ何も——」若いオリンパスの神が疑い深く何かを言おうとした。

「ばかだな。フェリシアはエッセンランドの同盟国だ。マルクスランドはボロヴィアの同盟国だ。イングランドはマルクスランドとフェリシアの間でバランスをとっている国の同盟国の同盟国の同盟国じゃないか。」

「だけどそのうちの誰かがこう考えたとしたら、これらのできごとが馬鹿げているとか不条理だとか——」

「それは彼らの『威信』に関わることじゃないか」神々は厳かに言った。思わず吹き出してしまわないように気をつけ

ながら。

「ああ、そうか」若い神は言った。）

そして1年が過ぎたころ、10万の英国の母親たちは夜中まで起きて、その息子が銃弾に倒れたことを通知する手紙を読んでいた。彼女らが馬鹿げた涙を流して、世界は終わりだなどと考えなければよいのだけれど、目先のことしか見えないかわいそうな生物たちよ！彼女らは気づいていないのだ。一昨日96番通りを行進していたあのポーキンスが、今ではすっかり活気付いていることを。

（「なんてやつらなんだ」と若い神が言った。）

A. A. M (viii)

[訳注]

- (i) 原文は “He had marched round in ninety-seven that morning, followed by a small child with an umbrella and an arsenal of weapons” (“Armageddon” 87). ポーキンスは傘とおもちゃの武器を持った子どもを引き連れ軍隊行進の真似事をしたのだと思われる。
- (ii) 1914年の初夏に、ミルンはこのポーキンスの発言とほぼ同じものを実際に耳にしたという。その言葉を発したのは「愛国主義者」(a Patriot) であり、「兵役の年齢をとうに過ぎていた」(himself well past the military age) 人物だったという (*Peace with Honour* 88). おそらくミルンがその人物を見かけたのは「アルマゲドン」執筆当時のことであり、ポーキンスはこのミルンが見かけたという愛国主義者同様、兵役の年齢を免れた老齢の人物であると考えられる。
- (iii) 原文は “What will happen to him in the next world I do not know…” (“Armageddon” 87). ここではメタフィクションとして筆者が登場し、神々でさえ筆者の意図通りに動かなくてはならないことを示している。
- (iv) このトムスク大佐の「国旗銃撃事件」は、作品内で後に戦争を引き起こす直接的な原因となるものである。わずかな銃弾が戦争を引き起こすという点で、明らかに「サラエボ事件」のパロディとして描かれている。
- (v) この論説委員の記事の中で初めて「威信」(prestige) という単語が出てくるが、作品内ではしばしばこの言葉は、登場人物たちが戦争を行うことの正当性を述べる際に用いられる。なお、ミルンは『名誉ある平和』の中で、「語源をたどれば、『威信』とは『幻想』や『ペテン』の意味である」(By derivation ‘Prestige’ means ‘illusion’ or ‘imposture’) と述べている (*Peace with Honour* 21). 当然この作品内でもミルンは皮肉を込めて「威信」という言葉を用いているのであり、そのため「神」が最後にこの言葉を用いる際、「思わず吹き出してしまわないように気をつけ」(trying not to laugh) ているのである (“Armageddon” 90).
- (vi) エssenランドからルリタニアに出された「最後通牒」は、ルリタニアによって一部拒否されることでついに作品内に戦争を引き起こす。この一連のできごとは、セルビアに出された「オーストリア最後通牒」をめぐる史実と完全に一致するものである。さらにその最後通牒のとりわけルリタニアによって一部拒否された要求は、実際の「オーストリア最後通牒」で拒否された要求の箇所とよく似ている。両者の詳細な比較は拙著「第一次大戦のカリカチュアとしての『アルマゲドン』」参照。
- (vii) 原文は “amidst a wonderful display of patriotic enthusiasm by those who were remaining behind…” (“Armageddon” 90). ミルンはここで、前線へと赴く兵士たちの見送りの様子を極めてアイロニカルに表現している。
- (viii) 「パンチ」誌の編集助手時代、ミルンは記事執筆の際「A. A. M」の署名を用いた。

引用文献

Champion, Neil. *Poets of the First World War*. Oxford: Heinemann, 2002.

“London and the Coming of War.” *Times*. 5 Aug. 1914: 9.

Milne, A. A. “Armageddon.” *The Sunny Side*. London: Methuen, 1921.

-----, *It's Too Late Now: The Autography of a writer*. London: Methuen, 1939.

-----, *Peace with Honour*. London: Methuen, 1934.

荒木映子.『第一次世界大戦とモダニズム——数の衝撃』世界思想社, 2008年.

小関隆.『徴兵制と良心的兵役拒否——イギリスの第一次世界大戦経験』人文書院, 2010年.

吉村圭.「第一次大戦のカリカチュアとしての『アルマゲドン』」: A. A. ミルンが描いた大戦前夜『比較文化研究』114 (2014): 281-294.

(2015年12月11日 受理)